

目次

凡例	vii
序 本書の構成と研究史概観	1
第一篇 専修大学図書館所蔵本の文献学的研究	31
第一章 伝冷泉為秀筆『源氏物語』桐壺卷本文の様相	33
一 はじめに	33
二 書誌・奥書	34
三 為経と為秀	40
四 為秀筆本の特徴	45
五 おわりに	48
第二章 伝藤原為家筆『源氏物語』古筆切試論	53
一 はじめに	53
二 書誌・翻刻	54

三	仮名表記から見た書写年代	58
四	本文の性格	61
五	おわりに	64
第二章	菊亭文庫蔵『源氏物語』抜書六帖考	69
一	はじめに	69
二	書誌・翻刻	72
三	『万水一露』との関係性	79
四	『源氏物語』における琵琶伝授と菊亭家	84
五	画帖草稿の可能性	93
六	おわりに	97
第二篇	室町期における『源氏物語』本文の伝来と享受	101
第一章	伝正徹筆『源氏物語』の伝来と奥書	103
一	はじめに	103
二	正徹本の書誌	104
三	正徹本六種の奥書	107
四	奥書の連関性	118
五	おわりに——奥書から想定される書写経路	122
第二章	正徹本の本文——国文研本・京都女子大本・慶應大本・書陵部本を中心に	129
一	はじめに	129
二	本文校異の割合	131
三	桐壺巻の比較	136
四	国文研本の様相	140
五	おわりに	144
第三章	大内家・毛利家周辺の源氏学——大庭賢兼を中心に	147
一	はじめに	147
二	大内家旧臣 大庭賢兼	148
三	賢兼の源氏学	154
四	おわりに	162
第四章	大庭賢兼筆『源氏物語』本文の様相	169
一	はじめに	169
二	賢兼筆本の書誌・奥書	170
三	賢兼筆本桐壺巻と正徹本の校合跡	174
四	おわりに	183

第五章 米国議会図書館蔵『源氏物語』の本文——麗子本対校五辻諸仲筆本の出現——	187
一 はじめに	187
二 古筆了仲による折紙の近似	188
三 LC本と諸仲本の共通異文	197
四 LC本・諸仲本・麗子本の連関性	208
五 おわりに	212
*麗子本・諸仲本・LC本の桐壺卷翻刻対校一覧表	216
第三篇 近世初期における『源氏物語』享受	237
第一章 専修大学図書館蔵『源氏物語画帖』の詞書とその制作背景	239
一 はじめに	239
二 専大本の詞書	240
三 詞書伝称筆者の筆跡	247
四 専大本の成立時期	253
五 詞書のコーデイナー	254
六 専大本の制作背景	258
七 おわりに	265
第二章 『源氏物語画帖』の絵における俳画師野々口立圃の影響	273
一 はじめに	273
二 俳画師としての立圃	274
三 専大本の絵と『十帖源氏』の挿絵	279
四 専大本の絵の特色	286
五 おわりに	291
第三章 野々口立圃作『十帖源氏』の本文構造	301
一 はじめに	301
二 『十帖源氏』の本文と和歌比率	302
三 『十帖源氏』花散里巻の本文	304
四 『十帖源氏』関屋巻の本文	311
五 梗概化の継承	317
六 おわりに——立圃の制作意図——	320
結	327
初出一覧	337
あとがき	341
索引	345

第二章 正徹本の本文

——国文研本・京都女子大本・慶應大本・書陵部本を中心に——

一 はじめに

本章では、国文研本、京都女子大本、慶應大本、書陵部本を中心として正徹本の本文について考察する。

正徹は東福寺栗棘庵の裏にあったとされる「招月庵」を出て以降、応永三十一年（二四二四）の四十四歳頃から死去する長祿三年（一四五九）の七十九歳頃まで住居を転々としている。稲田利徳氏⁽¹⁾によれば、頻繁に行われた転居は正徹の「生来の漂泊精神」によるものではなく、外的な要因があったという。その原因の一つに火災がある。文献によるものだけでも、正徹は三度の火災に遭遇している。⁽²⁾

永享四年（一四三二）四月 今熊野焼失↓京極辺へ↓三条坊門西洞院辺へ

文安五年（一四四八）四月 土御門万里小路の新造焼失

長祿元年（一四五七）三月 草庵焼失↓三条西洞院へ

これらの火災により、所持本の多くが焼失していることは正徹の歌集『草根集』からも窺える。永享四年（一四三二）四月二日の今熊野の草庵火災などは類火であり、正徹自身の過失ではない。注目すべきは、正徹本が書写され、

為相本と校合したと思われる嘉吉三年（一四四三）本、文安三年（一四四六）本が、これらの火災の起きた間に書写されていることである。

こうした三度の火災に関わる事項として、享徳元年（一四五二）年八月六日、仏地院（園城寺・三井寺）の長算に宛てた正徹の書状⁽³⁾がある。小川寿一氏、松原（三浦）三夫氏、稲田氏がすでに指摘し、書状の全文を掲載しているので、ここでは書状の内容はすべて明示しないが、概略は以下の通りである。

所蔵者 京都の宮崎半兵衛氏↓河野信一記念文庫（現今治市河野美術館）

判読 猪熊信男氏（蜂須賀喜心の子。猪熊夏樹の養子。宮内庁図書寮御用掛）・小川寿一氏・稲田利徳氏

書誌 縦二十六・〇糎、横七十一・〇糎の横長の懐紙。掛け物仕立。

内容 享徳元年（一四五二）八月六日、仏地院（園城寺・三井寺）の長算に宛てた書状。飛鳥井雅親卿の三度に渡る依頼にて、公方様（足利義政）へ、八月十五日より『源氏物語』を講義しなければならないので、三井寺蔵『源氏物語』の写本を拝借したいとの依頼状。

小川氏によれば、京都の宮崎半兵衛氏旧蔵の書翰であり、所蔵を転々とした後、今治市河野美術館に所蔵された正徹の書状である。宮崎氏は、『大成』において、河内本系統の伝藤原俊成筆『源氏物語』（鈴虫巻）を所持していたとされる人物である。この伝俊成筆鈴虫巻は現在、天理大学附属天理図書館の所蔵（請求記号…九一三・三六／イ三九五、重要美術品）となっている。また、小川氏が書翰の「判読については猪熊信男氏による處が多い」とされる猪熊信男氏⁽⁵⁾は、国文学者猪熊夏樹⁽⁶⁾（一八三五～一九二二）の養子である。猪熊夏樹氏は、明治時代の国文学者であり、讃岐白鳥神社祠官の子として生まれ、京都の白峯宮（現白峯神宮）の造宮に尽くし、官司となる。明治三十九年（一九〇六）

一月に宮中御開講にて『古事記』を進講し、『源氏物語湖月抄』⁽⁷⁾の校訂を行った人物である。

書状に見える三井寺の長算は、『草根集』にもたびたび登場する正徹の和歌仲間であり、正徹は何度も三井寺の歌会に招かれている。三井寺は紫式部の父、為時が出家した場所であり、紫式部の異母兄、定暹がいた場所でもある。書状の中で気になるのは、

①（ソデ書）「御本すま花ちる里よりまより花ちる里より權まで十帖借給はは畏入存候へく候」

②「桐壺より榊辺までも又かりとちの愚本を持参可申候」

という二箇所の記事である。②「桐壺」から「榊（賢木）」までは手元にあるので、続きの①「花散里」から「權（朝顔）」までの十帖を貸してほしいというのである。①「すまより」とあるのを消して、「花ちる里より」と訂正していることから、確実に花散里巻から所望していたことがわかる。

前述したように、正徹本が書写された前後、正徹の庵は火災に見舞われている。その際、正徹の手元にあった『源氏物語』の一部（「花散里」以降の巻）も火災に見舞われて消失した可能性が考えられる。そう考えれば、正徹本の桐壺巻から賢木巻までと、花散里巻以降の夢浮橋巻まででは、正徹本の性格に違いが見える可能性も考えられるのである。そこで本章では、これらのごとをふまえつつ、正徹本本文の実態を探ることとする。

二 本文校異の割合

正徹本本文の比較対象として、以下の正徹本を用いることとする。⁽⁸⁾

- ・国文学研究資料館蔵本（五十四帖）「国文研本」
- ・慶應義塾図書館蔵本（五十四帖）「慶應大本」
- ・宮内庁書陵部蔵本（五十四帖）「書陵部本」
- ・京都女子大学図書館吉澤文庫蔵本（桐壺卷）「京都女子大本」

現在確認できる正徹本のうち、国文研本・慶應大本・書陵部本は五十四帖揃本であり、京都女子大本は桐壺卷のみの零本である。

仮名写本の書写行為が行われる際の表記上の差異について論じた斎藤達哉氏⁹⁾によれば、慶應大本と国文研本の五十四卷の改行箇所的一致状況を比較すると、改行箇所の一致が多い巻と少ない巻があるという。斎藤氏は、国文研本と慶應大本の改行箇所の一致を、ある一定の規則にしたがって点数化し、点数の多い順、つまり、一致箇所の多い順に、五十四巻をA～Eの五つの群に分類している。

A群（480～400点）計三十九巻

紅葉賀、**花散里**、蓬生、閑屋、松風、薄雲、朝顔、少女、玉鬘、初音、胡蝶、螢、常夏、篝火、野分、行幸、梅枝、藤裏葉、若菜上、若菜下、柏木、横笛、鈴虫、夕霧、御法、幻、匂宮、紅梅、竹河、橋姫、椎本、総角、早蕨、宿木、東屋、浮舟、蜻蛉、手習、夢浮橋

B群（395～300点）計三巻

濡標、藤袴、真木柱

C群（295～200点）計一巻

絵合

D群（195～100点）計三巻

空蟬、末摘花、**花宴**

E群（95～0点）計八巻

桐壺、帚木、夕顔、若紫、葵、賢木、須磨、明石

これによれば、斎藤氏は、「奥書を有する巻ほど改行箇所に不一致が生じているということが分か」り、国文研本と慶應大本は「巻によっては書写態度が異なることが判明した」と述べる。第二篇第一章で正徹本の奥書の保有数を明示したように、国文研本の奥書がある巻（桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・葵・賢木卷の九巻）や慶應大本の奥書がある巻（桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・花宴・葵卷の八巻）ほど、改行箇所の一致しない巻が多い傾向が見られるというのである。

これをふまえて、正徹本の本文四種（国文研本、慶應大本、書陵部本、京都女子大本）の比較対象として、各A～E群より一巻ずつ、桐壺卷、花宴卷、花散里卷、濡標卷、絵合巻を取り出し、校異数を数値化した結果が表1（次頁）である。京都女子大本は桐壺卷のみの零本のため、表では桐壺卷のみで比較対象としている。本文を対校する際には、「い・る」「え・へ」「ひ・る」「う・ふ」「む・ん」「お・を」などの表記の差異、「給・給ふ」「給て・給ひて」などの表記、異本注記などは校異数に含めなかった。異本以外の補入やウ音便表記、「なと・なんと」、ミセケチ後の表記は反映し、校異数に含めることとした。

例えば、桐壺卷の国文研本と慶應大本（国慶）では二十五例、花散里卷の国文研本と慶應大本（国慶）では十一例の校異箇所が見える。これを『大成』の文字数で割合を計算すると、桐壺卷は全体の文字数一一、四八〇文字中、二